

2019年12月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

夜業せる大工の音や空木建	伊藤 武敏
固き椅子に座り直すも子規忌かな	羽鳥 正子
太陽電池パネルのノイズ星月夜	中嶋 文子
無花果を煮てゐる雨の日曜日	西村みゑ子
家族の目あつめ初成り林檎割る	佐々木 成
老眼の猟師が語りまさら酒	大石 高典
ちんちろりん久しかりけり夜の闇	中島 冬子
南瓜切る腕の力を試すごと	南田美恵子
塔頭に馬上門あり初尾花	城島 千鶴
大の字の背にありがたき今年藁	吉田多々詩
宙返る鷺のかたちの鳥威	高橋キセ子
拷問を解かれしこち涼新た	長浜 利子
よみがへる埴輪や土器や星月夜	真下 章子
秋日傘立て掛けてやる犬の小屋	藤本 隆子
秋麗ら愁ふることも忘れみて	友永基美子
軽らかに雨戸繰り込み厄日去る	川上 和昭
風向きのやや変はりあり処暑の朝	植田 清子

どこでもドアあれば友訪ふ秋の暮	たむら 晩秋
秋雨の海や基地建設の地に	知念 幸子
梅雨明けて日ごとに青し浦の海	藤野 孝夫
明朝体に資料統一厄日来る	古川 邑秋
都有地に夜を鳴きつなぐちろ虫	川内 麻美
秋日和ロシアの猫は愛想良し	河村 純子
泥付きし稲を洗へば黄金なす	山口 容子
おろおろと夕顔の実を抱へをり	谷口 文子
望月と夜明けの山や地藏尊	斉藤 耐
田から田へ千枚の音水落す	遠藤 長代
稲架掛けに峡の日陰のおよび来し	渋谷 啓子
秋深し鍵盤にドの印付け	仁田 浩
思ひ草出逢ひしところ秘めておく	西五辻芳子
グローブの革のにはひや秋の空	佐藤 聡
ゆらぐ灯や雨降りしきる盆詣で	櫛淵かりな
赤とんぼ田んぼさはさは乾きけり	酒井 富子
蒟蒻に三年の秋むかへけり	益子 桂子
虫の声までも家族よ退院す	大野千鶴子
秋の蚊に生きてゐしかと逃しけり	東 俊子



色白の母のおもかげ糸瓜水

田崎セイ子

2019年11月

当月の水壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

夜の雨の地を打つ強さ夏の果て	益子 桂子
草笛や昭和の歌を引き寄せて	遠藤 長代
ほほづきのぷくりと熟れて空青し	大野千鶴子
長き夜や灯火管制ありし頃	伊藤 武敏
牧圀む青嶺の奥の大青嶺	佐々木 成
その中に海釣りの灯や星月夜	鴻坂 佳子
甲斐なれや丘の形に葡萄棚	宮澤 淑子
風鈴は不器用に鳴るばかりなり	片山 旭星
生も死も紫陽花も色濃くなりぬ	山本 真也
音たてて水呑む猫や秋暑し	長浜 利子
室温をやや上げ気味に秋近し	田崎セイ子
蟬の声のみ響きをり原爆忌	山口 智子
海よりも暮早き山赤とんぼ	山中ひでの
年毎やメモを頼りの盆仕度	福地 義雄
面と小手を干し並べたり帰省の子	藤本 隆子
掃除すませ着替へすませても残暑	村木 道子
小流れに沿ひて参道涼新た	城島 千鶴
山寺の緑蔭にあり慰霊の碑	森 すゞ子
主亡き畑にかたぶく案山子かな	吉田多々詩

新涼や鉄砲魚の狙ひ打つ	川内 麻美
水槽に水跳ぬる音今日の秋	川内 一浩
台風や庭の真中に脚立伏せ	真下 章子
盆すぎや部屋を抜けゆく風豊か	渋谷 啓子
それぞれに橋ある社家や水の秋	木村 静子
終戦日父は子の墓撫でしのみ	森 幸子
新涼や寝入りし嬰の涙あと	前田 鈴子
大文字の消炭求め夜明け前	丹羽 康夫
夕蟬や熱の下がらぬ子の虚ろ	谷口 文子
樹液濃し大紫の蝶の舌	堀口 忠男
夕立に傘さしかけてくれし人	石原ゆき子
桂離宮拝観日なり驟雨来る	牛田あや美
夕焼を同じと遠い街の友	昌山瑠美子
新涼や六歩に渡る狸橋	中井 昭雄
雨粒のあぶくの立つや大夕立	仁田 浩

釣忍作りし父やいまは亡く	南田美恵子
新蕎麦や喉ごしはこの一瞬に	山中伊蘭子
折紙や昭和恋しき秋の夜	東 俊子
語り合ふ水面の灯り原爆忌	田中 勝
杖突きて老の踏ん張り秋暑し	長瀬 朋孝
猿山の猿の動きも極暑かな	城戸崎雅崇
ユニホーム脱がず駆け入る夏の海	中野 悦子

2019年10月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

ををしさやルーペのなかの子蠅螂	中島 冬子
射干の花かたはらの布袋さん	城島 千鶴
恐竜のひそむ気配か夏蕨	遠藤 長代
七夕や異国の文字の少女にも	立石 律子
あと一駅の席をゆづられ半夏生	村木 道子
並べたる衣に未来お風入	河村 純子
まだかたき桃に歯をあて香り食ぶ	小畠 和
筒鳥や袖夫ほぼぼる輪つぱ飯	佐々木 成
毒あると夫の制する夾竹桃	川内 麻美
振花や時計回りに閉まる蓋	川内 一浩
鳴き鳴きて果てたる蟬の翅の美し	山本 京子
ながむしのあるかもしれぬそのあたり	山本 真也
初蟬と聞きしが夕べ落蟬に	宮澤 淑子
じりじりと慰霊碑の火や蟬時雨	田中 勝
夏空や目に風運ぶポプラの葉	鈴木あるの
夏の夜や芳一聴かば八雲をり	宮原亜砂美
娘らの団扇は笑ひ喋るごと	仁田 浩

抜歯後の止血の綿を噛む極暑	長浜 利子
トーストの焼けて初蟬じいと鳴く	朝田 玲子
嘶きや斎王代の懸葵	谷口 文子
葦の丈伸びよ伸びよと行々子	堀口 忠男
履き慣れぬ下駄のはしやぐ夏祭	前田 鈴子
夕河岸の立ちしはむかし防波堤	中野 梓
校庭にラジオの響く夏休み	森川恵美子
嵩に積む下刈の草いきれかな	中村 順次
トラクターはゆつくり慌て蝸牛	丹羽 康夫
追ひ出しぬ守り神てふ蜘蛛なれど	中村 悦子
藁屋根に遺影に過ぎし終戦日	鴻坂 佳子

滑莧引く戦時に食べしことなれど	羽鳥 正子
板の間に風すべらせて扇風機	真下 章子
噴水の頂に立つ少女像	城戸崎雅崇
朝いちばん声をかけつつ胡瓜もぐ	山口 容子
帰省子や波音のみの始発駅	山中ひでの
鮎に串刺して焼くなり男なり	片山 旭星
片蔭や帰りに語りつぐベンチ	中井 昭雄
片蔭を行けば会場遠退きぬ	南田美恵子
羽衣のいろ貰ひしか蓮の花	森 幸子

2019年9月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筧 集

子規庵の部屋半分へ西日射す	鴻坂 佳子
あぢさゐの色いまと剪る朝まだき	宮澤 淑子
少年の声は木の上柿の花	西村みゑ子
光り合ふ出羽一国の代田水	佐々木 成
雨つつ切り餌運び来る夏燕	酒井 富子
梅雨に入る雨垂れ時に不整脈	中島 冬子
斎宮趾に世の音遠き青葉闇	中野 梓
迷路めく鉄路乗り継ぎ梅雨の旅	遠藤 長代
畦塗りにて棚田の底の昼餉かな	川上 和昭
残業の父の夕飯蠅帳に	田崎セイ子
七夕や日に三羽折る千羽鶴	友永基美子
井田に早乙女揃ひ太鼓の音	長瀬 朋孝
語り部を若手に継いで慰霊の日	福地 義雄
紫陽花に先づ母の忌を思ひけり	村木 道子
万緑のふところのなか斎王碑	山中ひでの
あぢさゐや寄り道につい十日間	朝田 玲子
夏めくや神前に能献じ終へ	河村 純子

似顔絵が少し納得いかぬ夏	川内 麻美
寄りそひて鳩の浮巢の水輪かな	栗本 一代
ひとり来て蛍こいこい土手の径	中村 順次
校正のペン入れ乱れ虎が雨	大石 高典
はね返す鱈の青さよ夕餉前	小畷 和
いきなりの九十九折なり登山口	野木 正博
草むらをかき分けて浜夏来たる	仁田 浩
雨合羽備へぬうちに梅の雨	南田美恵子
音階のごとく節ある葦簀かな	鈴木あるの

白南風や牛の尻尾の揺れどほし	中井 昭雄
知らずして子が植ゑし苗胡瓜咲く	山本 京子
車間距離大きく取つて夏惜しむ	山本 真也
青梅を見上ぐる母に笊を出す	田中 勝
負相撲の西瓜に落つる涙つぶ	中野 悦子
しつかりと壁の色なす雨蛙	酒井 富子
木葉木菟の飛来地ダムに沈むらし	堀口 忠男
天明噴火いま裸地の薄暑光	森川恵美子
蜘蛛の囿に雨の水玉二つ三つ	城戸崎雅崇
夏の庭へぐいと押しやりアロエヴェラ	富沢 壽勇
近江路に風の音聴く麦の秋	片岡 旭

2019年8月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

鯖釣や沖のうねりに山育ち	伊藤 武敏
草取の一人はご住職の作務	真下 章子
遠き日の馴れに草笛鳴ることよ	大野千鶴子
筍掘る祖父は今期を限りとふ	荒木 昭代
綿シャツに糊を利かせて今朝の夏	植田 清子
古沼や日照雨の欲しき雨蛙	志多伯節子
バードデー籠に戻らぬ鳥いづこ	田崎セイ子
柿若葉老いに眩しき朝日差す	長瀬 朋孝
水ふくむジュラ紀の石や緑さす	西五辻芳子
いぬの仔のもらはれし家花いばら	西村みゑ子
梅雨最中不発弾処理続きをり	福地 義雄
着衣をば何も変へずや立夏来る	村木 道子
白シャツの出番なきまま飛驒の旅	山口 智子
黙々と籠引き摺りて草取女	山中ひでの
母の声聞きたく唄ふアマリリス	小川 豊子
眠る子にハンカチを以て風送る	川内 麻美
待ち侘ぶや少しく乾き柏餅	河村 純子

甕へ雨集むるシデや夏の島	益子 桂子
時差一時間後のニュース梅雨に入る	小鳥 和
流鏑馬の的飛ぶ先を目に追うて	栗本 徳子
鱒叩く音や釣果の乏しくも	朝田 玲子
滝行の祈りとどろく空也滝	野木 正博
指定席とハンカチ敷きて君を待つ	森川恵美子
船底に海底を見る立夏かな	牛田あや美

蛍火に勝ち負けあらば右の勝ち	南田恵美子
雪形は鷹の貌なす白根山	堀口 忠男
粽解く心の襷を解くごとく	城戸崎雅崇
恪勤の靴音過ぐる柿の花	中村 順次
命日や熊野の藤は盛りすぎ	丹羽 康夫
青時雨螺灯かた手にひおひ坑	宮原亜砂美
風死せり遺品を捨つるために酔ひ	吉田 達哉
寝袋に見上ぐる小窓青楓	森 幸子
こふのと舞ひ降りて来る青田波	山口 容子
笛の列果ての果てまで植田あり	吉田多々詩
トラックに稚児ふたり乗せ春祭	石原ゆき子
警笛の追ひかけてくる薄暑かな	中井 昭雄
勁草のよろしかりけり風薫る	仁田 浩

2019年7月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

水音の弾みに蝌蚪の紐弛む	川内 一浩
花散るや目玉ぎよろつと閻魔王	伊藤 武敏
掬はれて人に飼はれて蝌蚪となる	福田 将矢
雪形や岳のくぼみの馬の脚	高橋キセ子
軒下へ家族のやうに燕来る	酒井 富子
囀りが色添へはじめ里の山	益子 桂子
遊ぶ子の手に散らさるる雪柳	川内 麻美
山国に海豚の化石春うらら	長浜 利子
笛の音の田の面流るる春祭	吉田多々詩
考えの行きづまりたり露を煮る	羽鳥 正子
落花浴ぶる館を統べて鬼瓦	中野 梓
菩提寺もいつしか古刹夕桜	植田 清子
病床の妻に残像白牡丹	川上 和昭
夜桜や大提灯に令和の字	立石 律子
眺め入る望や平成四月なり	福地 義雄
彼岸詣つぎはいかなる吾が齢	村木 道子
胸上に十指を組みて春惜しむ	山中ひでの

十返りの花や復元武家屋敷	城島 千鶴
退屈な午後良しとして日永かな	片山 旭星
坂がかかる墓地へつらつら椿かな	宮澤 淑子
つばくらめ武家の長屋の軒低し	森 すゞ子
改装をしてゐるらしき燕の巢	古川 邑秋

春耕の桑の片減り父は亡く	遠藤 長代
花鉢に生まれ百足虫が畳這ふ	酒井 富子
燕きて昂る軒端そつとして	森川恵美子
横丁や少し小ぶりの花ミモザ	城戸崎雅崇
岩ばしる水のとどろに初つばめ	中村 順次
駿府城の路に阻まれ花筏	富沢 壽勇
春の鴨ともだちめきて初瀬川	丹羽 康夫
春筍の皮むく音の心地よき	宮原亜砂美
花の種蒔きて御百度ほど覗き	前田 鈴子
苗床の競ふごとくに二百箱	山口 容子
春昼の山並み煙り猫眠り	斎藤 耐
鉢植のみつば一皿肴とす	藤本 隆子
地震あとに槌音響く春の雲	東 俊子
初蝶を追うて千本鳥居かな	三原真紀子
花栗の香の地に低く奈良の闇	栗本 一代

2019年6月

当月の水壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

海上の風車ゆるりと油まじ	伊藤 武敏
旧道の岬の難所や揚雲雀	佐々木 成
本堂の障子明るき涅槃かな	酒井 富子
幾百の雛の視線にさらされて	益子 桂子
じやんけんの必勝法や山笑ふ	川内 一浩
色褪せしチケット二枚朧の夜	羽鳥 正子
仰ぎみる花に一身浮くごとし	鴻坂 佳子
諸共に齢かさねて雛も古希	中島 冬子
春眠を妨げにくる猫の鈴	長浜 利子
冴返る蔵書にしかと父の文字	渋谷 啓子
鳥雲に観察小屋にのこる餌	真下 章子
うぐひすの鳴くに口笛合はせをり	大野千鶴子
半合の米とぐ日々や彼岸寒	川上 和昭
腰までの潮に手摘みの石蓴かな	中野 梓
青年が傘差しくる木の芽雨	山口 智子
鳥帰る神の恵みの伊勢の海	山中ひでの
啓蟄の地に下ろされて杭の束	高橋キセ子

三角も四角もありぬ猫の恋	川内 麻美
九十の重みを杖に託す春	長瀬 朋孝
ダムに水満ち三椏の花盛り	前田 鈴子

手にのせて子は花と言ふ春霽	山本 京子
ふきのたう三日見ぬ間に臍たけて	遠藤 長代
桜咲くに灰の降り来る桜島	野中 理伸
折りし子の笑みによく似し紙雛	吉田多々詩
春深し今日のをはりを横になり	森 裕子
花冷の石炭専用鉄路かな	中村 順次
藪椿くぐりて登る分教場	森 幸子
稜線の木々透けて見ゆ春の空	山口 容子
草餅や兄弟喧嘩ありし頃	中井 昭雄
春雨のぽつぽつと音が寄る	小野塚佳代
でんでんと卯の刻告ぐる春社かな	野木 正博
三月やキミマチサクラ忘るまじ	藤田 裕之
暁鐘や山抜けてくる春の風	田中 勝
白魚の命透けある一寸余	朝田 玲子
墨の濃き一字一気に新学期	中野 悦子
浜大根列車過ぎてもゆれやまず	本多 智恵
蛇穴を出て古里に神宿る	志多伯節子

2019年5月

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

折紙の角一つ立て鬼は外	中嶋 文子
旧道の埋もれかけたる春の山	羽鳥 正子
寒雷の轟き氷見は漁師町	伊藤 武敏
山寺の鎧ふは千の大氷柱	佐々木 成
魚は氷に上り試験の日のつづく	高橋キセ子
春駒の寝足りて藁にまみれをる	朝田 玲子
坂道のはじまりに会ふ梅の花	鈴木 春菜
春昼や声の見つかるかくれんぼ	渋谷 啓子
念入りに顔拭いて出る恋の猫	森 すゞ子
山間の暮しが動く梅の花	酒井 富子
着ぶくれの首より体温計入れて	益子 桂子
空つ風出迎ふるとと駅舎前	遠藤 長代
水際に腹這うて採る露のたう	中島 冬子
盆栽のひよんと抜きんで臥竜梅	城島 千鶴
一湾が石蓐や畑のごとくあり	西村みゑ子
トナカイの話し聞きゐて冬尽きぬ	大石 高典
数百の鳩のしづけさ余呉の湖	鈴木さやか
喉飴ののどに馴染み息白し	川内 一浩

降る雪のさまを幾度も窓開けて	村木 道子
露の臺一つつきりを囲ひやる	藤本 隆子
身繕ひ次は何せむ初鴉	三原真紀子
白足袋の摺り足美しき狂言師	植田 清子
苗木植う難を転ずるまじなひに	吉田 達哉
臥す身にも春日ひとしく来たりけり	河村 純子
春浅し心浮き立つもの探し	鈴木あるの
薄氷の裏道うまく抜けて来し	古川 邑秋
若き日の言葉足らずや草の餅	森 幸子
亀らしき泥盛り上がり春近し	仁田 浩
耳澄ます鶯餅を掌に受けて	長瀬 朋孝
冬の月高し遠きは母のこと	立石 律子
雪空へ溶けゆく色の煙立つ	城戸崎雅崇
寒暖も暦どほりに春立つ日	藤田 裕之
豆撒の一夜明けたる庭に鳥	大野千鶴子
吾が餌へ氷を砕き白鳥来	西澤 勝
種紙に蚕の卵ひつそりと	森川恵美子
月の無き比良の山並み冴返る	片山 旭星
嵩よりも軽き苞なり若布なり	東 俊子

2019年4月号

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筍 集

気の上る思ひ鎮めて初鼓	河村 純子
塩抜きの茸に呼び塩寒四郎	高橋キセ子
東雲へちりぢりと消ゆ寒鴉	三原真紀子
農道に人並びをり初日の出	藤本 隆子
水仕了へ母が楳火に手を翳す	佐々木 成
冬空を透かしすつくと吉野杉	小寫 和
オリオンを高く掲げて星の数	川内 一浩
咲きしこと香をいちばんに裏の梅	中島 冬子
午後なれば片目失ひ雪うさぎ	田崎セイ子
勢づくどんどに気流見えてあり	羽鳥 正子
蝦芋の名残を買うて果大師	城島 千鶴
幼子の凧揚げの凧地を這うて	木村 静子
初夢は基地なき島よ鳥が舞ふ	知念 幸子
おみくじをよきに読み解き初詣	荒木 昭代
川底を鶻のあゆむも寒の内	田村としのぶ
いま出でし朝日とらへて麦青む	本多 智恵

初釜やすすと躡りて膝頭	西五辻芳子
小春日や柵に馬衣干されあり	森 すゞ子
杖の音しづかに通る年の暮	知念 恒男
よく売れるおばあの話年の市	福地 義雄
山眠りをる湯煙の隠れ里	川竹 美樹
陣痛の長き夜明けて薄氷	栗本 一代
研ぎ澄みし音の俎始かな	渋谷 啓子
あれあれまあ背ナの子どもの頬被り	前田 鈴子
日捲りの滞りある七日かな	長浜 利子
足跡に迷ひの見ゆる雪の上	益子 桂子
早まりし刻の高さにオリオン座	吉田 達哉
鴉鳴くのみ別宮の四日かな	中野 梓
寒の雨上るしづけさ阪神忌	斎藤 耐
雪落し竹はゆらりと背を伸ばす	石原ゆき子
東海の磯の香りよ冬座敷	牛田あや美
シンデレラ新幹線とやなごり雪	小川 豊子
年越や昨夜と変はらぬ今朝の酒	片山 旭星
寒柝の響き近づき遠ざかり	東 俊子
鳥来るに零すが多き実南天	田中ミヨ子
千支の本並べ図書館冬休み	中野 悦子

2019年3月号

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筧 集

脂採りし幹労りて松手入	山中ひでの
冬晴や釣られしものへ鳶の笛	羽鳥 正子
一湾を寒気の過ぎる監視小屋	志多伯節子
宇治川の疾き瀬音に山眠る	荒木 昭代
二重扉なんなく抜くる寒気かな	益子 桂子
短日や衝動買ひの袋提げ	高橋キセ子
餅米を洗ひ師走は人恋し	西村みゑ子
枯木星夜間飛行の灯が紛れ	植田 清子
冬灯し肉桂香るドイツ菓子	木村 静子
小雪や山並み撫づる雲の影	渋谷 啓子
年用意はや始まりぬ御用聞	村木 道子
べた風の海の冬鳥光りけり	本多 智恵
蠟八や暮れて魚鼓打つ僧衣美し	栗本 徳子
一月の燭一灯に千の黙	栗本 一代
しぐるるや三鈴の松を生し立て	城島 千鶴
冬だねと言へば頷く君のゐて	川内 一浩

竿先の躍るは冬の真鯛なり	宮原亜砂美
独り発つ子へ書くメリークリスマス	小野塚久子
赤き実を含めば苦し十二月	川内 麻美
親と娘呼び名の違ふおでん鍋	山本 京子
編みかけのセーター二年越しのこと	南田恵美子
ボルシチの味に正午の冬日かな	朝田 玲子
笹鳴や柞の森の枝が揺れ	中村 順次
好まざれどたくわん漬けて四斗樽	森 幸子
薬草の根のまぶしさや寒の水	山口 容子
冬川に一筋まじる湯の煙	真下 章子
本を読み耽る日となりクリスマス	小野塚佳代
大木の倒れて鶴の高音かな	石原ゆき子
年の瀬や役者は閉店間際に来	伊藤 恵
不定時法よろしかりけり日短	仁田 浩
間水は畑の蜜柑よ野良仕事	藤本 隆子
霧襖開け放つごと道が見え	青井 律子
板割の拳鍛へて去年今年	山城由香里
伊予石の緑泥片岩万年青の実	塚本 郁子
咳しつつ帰り来るなり午前さま	田崎セイ子
鴨の群乱す銃声蘆に風	田中ミヨ子
たわわなるもの無きは冬ざる庭	田村としのぶ

2019年2月号

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷 筈 集

夕風に枯野のひびき易きかな	高橋キセ子
日光街道菰巻く松へ雲垂るる	伊藤 武敏
遠吠えの間遠や長き夜のパズル	鴻坂 佳子
涙拭かず行く道はここ木守柿	中嶋 文子
冬うらら裏の畑もポチも無く	川内 一浩
空はひとつ孫は巴里にて翳雲	友永基美子
一部屋に猫とぢ込めて障子貼る	長浜 利子
魯田のことごとく彩違へあり	荒木 昭代
ゆく秋や昭和を遠く思ふとき	植田 清子
いつよりぞここに置かれし鴝の贅	大野千鶴子
追ひかけて来て渡されし柿三つ	立石 律子
初霜や鍬打ち込めば火花散る	田中ミヨ子
紅葉山お茶に集まる茶の間より	田村としのぶ
月の夜を語りあかしてしまひけり	知念 幸子

冬の海静かに広し御用邸
小春日や伊良湖岬に定期船
菩薩の名三つおぼえて柿日和

村木 道子
森 すゞ子
山本 真也

波郷忌のこのまま空へ観覧車
時雨ても羅漢の貌はそこにあり
葡萄酒にほてりし頬の夜寒かな
鳩のみて波の騒ぎのなかりけり
乱れたる竹伐る音や背を正す
林檎喰ふときの乙女は魔女の貌
水槽の魚動かぬ冬日かな
段取りを末から数へ十二月
作業着に着替へ手を貸す大根干
見過ごしし事の多さや椿の実
身にしむや鴉に怯む鳩のみて
柿干すや庖丁にある渋のいろ
綿虫を手にのせ子供心なる
黒々と十一月の裁ち鋏
人生に宿題残る落葉かな
バス停や日の出時刻の初時雨
今朝またも京の底冷えひとしきり
北山を越え来る雪の匂ひかな
大根の青首並ぶ植木鉢
素人に長短のあり柿簾

川内 麻美
栗本 一代
小寫 和
吉田多々詩
西五辻芳子
宮原亜砂美
城戸崎雅崇
山本 京子
遠藤 長代
中井 昭雄
南田美恵子
益子 桂子
酒井 富子
真下 章子
森 裕子
斎藤 耐
北川 明
仁田 浩
田中 勝
小野塚久子

2019年1月号

当月の水壺集・氷室集より尾池葉子抄出

水 筍 集

陽のいろの上昇気流鷹渡る
露けしやゆつくり落つる鳥の羽根
この町にこの空のあり小鳥来る
台風の手荒き誕生祝ひなり
鴟の贄見つけし今朝の庭掃除
庭下駄のぼつりと置かれ秋深し
軍鶏の勝負決まらず暮早し
千振や亡父の苦り顔がふと
秋薔薇花がら摘みて香に噓せて
遊子ともなれず佇む花野かな
柿喰ひに夜毎来たるは何の鳥
朝市の通草ほどよく割れてあり

伊藤 武敏
高橋キセ子
川内 一浩
植田 清子
大野千鶴子
田崎セイ子
田中ミヨ子
友永基美子
長瀬 朋孝
西村みゑ子
福地 義雄
真下 章子

論じ合ふ窓の向かうり秋日和
短日の帰宅は淋し独りの居
たれ待つや冬田の畦の白き犬
くまげらの消えたる山のうつろかな
未枯るる木の間に赤き実を見せて

南田美恵子
村木 道子
三原真紀子
佐々木 成
山本 京子

長病みの見立て変はらず冬に入る
恙なく終り稲の香ある刈田
長き夜や引越しを待つガムテープ
夜学生をり裸灯の無人駅
倒木に生ゆる茸は見捨てられ
新しき熊の栗棚二つほど
瓢の笛吹く縄文の子のやうに
農道に刈稲並ぶ奥丹後
夜が更くる頃や鞠子のとろろ飯
回覧板に稚児の募集や秋祭
かぐや姫気分の縁や月見酒
朱き実の小さきに秋の移りけり
鈴虫の声のかすれや夜が明くる
この里の風は変はらず吊し柿
稲架に稲架けて本日終はりとす
子らよ子らよ秋果は全部あげるから
月明り机に諸手突きて立つ
月光に汐のしみ込む干潟かな
行列を少し離れてゐて小春

吉田多々詩
酒井 富子
川内 麻美
遠藤 長代
渋谷 啓子
長浜 利子
林 清恭
古川 邑秋
宮原亜砂美
石原ゆき子
牛田あや美
小川 豊子
田中 勝
仁田 浩
藤本 隆子
山本 真也
山中ひでの
川上 和昭
志多伯節子